Cartoon says it all.

マンガをみれば世界がわかる

毎日新聞専門編集委員
西川恵

Somalia Famine By Emad Hajjaj, Jordan,
August 22, 2011

ソマリア大飢饉

アフリカ東部のソマリアで、深刻な干ばつによる飢饉が広がっている。国連食糧農業機関（ＦＡＯ）によると、紛争と食糧不足で約三七〇万人が餓死の危機に晒されている。多数の難民がケニア、エチオピアなどの周辺国に流出しているが、難民キャンプはどこも飽和状態だ。

ソマリアはこの二〇年、内戦が続き、暫定政府は首都モガディシオの一部を押さえるだけ。沿岸では武装した住民が海賊となって外国船を襲い、南部ではイスラム過激派組織が暗躍。暴力と略奪の絶えない「破綻国家」だけに、干ばつにはひとたまりもなかった。

飢饉はとくに南部地域で深刻だ。過激派組織は国連機関の食糧支援活動を妨害し、物資が人々に届かない。清潔な水も不足し、コレラ感染者が急増している。英国のミッチェル国際開発相は「国際社会が対応を強化しないと、子ども四〇万人が餓死する恐れがある」と警告している。人災の側面も強い飢饉。国際社会の支援拡大が急務だ。

カダフィ政権崩壊

四二年間、独裁体制を敷いてきたリビアのカダフィ政権が倒れた。チュニジアとエジプトの民主化に刺激されて、リビア国内で反政府デモが勃発したのは今年二月。これに対する武力弾圧は人々の怒りに火をつけた。人々は銃を手に取り、米欧の支援も得て、最後は首都トリポリがあっけなく落ちた。反政府デモから半年の出来事だった。

これを書いている時点でカダフィ大佐の所在は不明だが、「案山子だったカダフィ」は言い得て妙だ。秘密警察、密告制度と、盤石な独裁体制を築いた政権も、コケ脅しの案山子に等しい末路だった。

カダフィ大佐は巧みに国際社会と融和したと見られていた。二〇〇三年のイラク戦争後、米欧の矛先が自国に向くのを恐れ、大量破壊兵器開発計画を放棄。米パンナム機爆破や西ベルリンのディスコ爆破でも関与を認め、遺族に補償金を支払った。国際社会との関係正常化で外からの脅威を遠ざけたと慢心した分、内がおろそかになったのかもしれない。

Gaddafi Scarecrow By Osama Hajjaj,
Abu Mahjoob Creative Productions,
August 25, 2011